

① 『流れ星』

柱に寄り掛かったまま少し眠ったようだ。顔を上げると、いつの間にか夕陽が障子を赤く染めていた。裏戸の隙間から明かりが差し込んで、土間の奥の鴨井に掛けた利之助の野良着が、その光に浮かび上がって見えた。

もう十日もそのままになっている。倒れた時に出来た袂のほころびもそのままだった。

ミチは、おも湯の仕度をしようとして、そつと立ち上がって利之助を振り返った。ずっと続けている高熱の所為で、利之助の眼窩は黒く落ち窪んでいる。その顔を見ながら、激しく込み上げて来る胸騒ぎに、ミチは押し潰されそうになっていた。

その日、畑に出ていた利之助にミチは昼餉を届けた。いつもそうしている。それはミチにとって心弾むひと時だった。

畔を小走りに急ぐ先に、夫が畑仕事の手を止めてミチを待っている。胸元に抱えた握り飯の暖かみが手に伝わって、それはそのままミチの幸せの温もりだった。

もう手が届きそうな所まで近づいて「お待たせしました」と声を掛けようとしたその時、立てた鍬の柄の先に両手を置いてミチを待っていた利之助の体がぐらりと崩れ、そのまま畔の斜面を転がり落ちて行った。

一瞬何が起こったのか理解出来ずに息を呑んだミチだったが、次の瞬間には、悲鳴にも似た叫び声を上げながら斜面を駆け下りていた。

長府藩の藩士であり医術の心得もあるミチの父親由永が、お役目の行き帰りに毎日利之助を見舞った。脈を取り、胸の打音を聞いて薬を調合した。

その由永の顔が日を追って険しくなるのをミチは見逃さなかった。

今朝

「私のお役目の間に利之助の容態が悪くなるような事があれば、これを吞ませるのだ。よいな。」

そう言つて、由永はいつもとは違う薬を処方した。

ミチは、そんな時が来るのですか、と尋ねようとして言葉飲んだ。返事を聞くのがこわかったのだ。聞けば、利之助との八年間が、跡形もなく消えてゆくように思われた。

台所で竈に火をいれながら、ミチは、もう一昔以上に前に出会ったある光景を思い出していた。

川向うの、おせいちゃんの家を出たのが七つ半(夕方五時)頃だった。ミチは、おせいとおお喋りが少し過ぎたかな、と神社に続く橋を小走りに渡り始めた時、神社の鳥居を出て川下へ向かう十人ほどの一団を見た。

普段見かける野良着姿の大人達ではない、皆、紋付を着

ている。

その集団の中に一人ほっそりとした若者の姿が目にとまった。月代が綺麗に剃り上げられている。遠目にもそれがはっきりと分かった。

そうだ、今日は二町ほど先に住む村田利之助の元服の日だ、とミチには分かった。

時折、野良で鍬を振るう姿を見かけることはあったが、四く五才年上の利之助はうんと大人で、ミチの遊び相手でも話し相手でもなかった。

しかしこの時、綺麗に剃り上げられた月代を見た十二才のミチの胸の中で、何かごとりと、とちいさな音を立てた。急に波立った胸のざわめきを訝りながら、ミチは両の手首をくると回して袂にいれると、何食わぬ顔で栗野川に掛かる橋を渡りきった。

そんな事が有ったことすら忘れていた十六才のある日、村の世話役が利之助との縁談を持込んで来た。

その時も、はるか四年前に橋の上から見た、あの時の光景を思い出した。と同時に矢張り胸の中で、不思議な音を聞いた気がした。

それから八年が過ぎて、ミチは今、心の底から利之助を慕っている。言葉ではとても言い表せない。今では、二人が一つの魂を共有しているとしか思えなかった。

それなのに、利之助が今にも遠くに行ってしまうようで、

ミチは怖くて仕方がなかった。

作ったお湯も、父が処方した薬も飲んでくれなかった。いつもならもう来る筈の父もまだ来ていない。

泣き出したい気持ちを、流しの縁に両手を衝いてこらえるミチの足元には、いつの間にか夜の闇が忍び寄っていた。

「お父様早く、早く来て下さい」。ミチは心の中で叫び続けた。

待ち兼ねて、裏戸を開け外に出た。父の姿を探すミチの目には、暗闇の中に遠く、二つ三つ家の灯影が見えるだけだった。

たまりかねて暗闇に向かい「お父様！」と呼びかけた。その時、頭の上を一筋、流れ星が西の空へ飛んだ。

その光跡が一瞬のきらめきを残して消えた時、ミチは胸の中で何かが崩れてゆく音を、今度は、はっきりと聞いた。